

# 琉球大学学術リポジトリ

玄月「蔭の棲みか」についての一試論：  
桐野夏生『ポリティコン』と比較して

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学人文社会学部琉球アジア文化学科 公開日: 2019-04-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 呉, 世宗, Oh, Sejong メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/44299">http://hdl.handle.net/20.500.12000/44299</a>

## 玄月「蔭の棲みか」についての一試論

### ―桐野夏生『ポリテイコン』と比較して

呉世宗

#### 一 はじめに

作家、玄月（一九六五年）は、これまで多くの作品を発表しつつも、芥川賞を受賞した「蔭の棲みか」以来、在日朝鮮人の密集地域や朝鮮人の歴史を描くことを大きなテーマとしている。例えば「悪い噂」や『眷属』などがそのテーマにあたる。そのさい描かれる朝鮮人密集地域に関して特徴となるのは、日本社会との関係において半ば対比的に位置付けていくのは当然のことながら、その内側の生々しい姿を描出していくところにある。従来、日本社会との関係において在日朝鮮人密集地域を見るときに傾向としてあったのは、加害／被害、支配者／被支配者とといった対立構造を植民地の歴史を重ね合わせて描き出すことであった。例えば成允植『オモニの壺』、呉林俊「たとえ嵐はすさぶとも」、李殷直「枝川町一丁目」などにそのような特徴が見られる。もちろんこれは間違っているとか、不十分だといった問題ではない。密集地域が形成された歴史や現在の在日朝鮮人対する日本政府の対応などを見たとき、そのような傾向は植民地的状況が持続しているゆえなのであり、したがってそれら文学作品の表現は

今以て正当である。しかし他方で、玄月が描き出す朝鮮人密集地域は、そのような日本／朝鮮といった対比も持ち込まれているものの、それに留まらず朝鮮人内部における序列的な秩序を書き込んでおり、別の検討を必要とする。またこのことは玄月の文学的な可能性を論じる際に求められることである。この検討に関しては、梁石日『夜を賭けて』における朝鮮人部落の表象との比較検討も有効であるだろう。しかし本稿では、在日朝鮮人文学内で比較検討するよりも、日本文学との関連で考察することで、その可能性をより明確にしてみたい。

本稿は、玄月の作品におけるその別様の秩序、そしてその行方を論じるにあたって、玄月の芥川賞受賞作である「蔭の棲みか」(二〇〇〇年)を取り上げる。そして王国と言ってもよい在日朝鮮人の世界が描かれる「蔭の棲みか」の特徴を明確にするために、同じく一九九〇年代末を時代的背景とする別の王国が登場する桐野夏生『ポリテアイコン』(二〇一一年)との比較を行う。桐野に関していうならば、女たちによる殺人を描いた『OUT』、沖繩を舞台に貧困層に落ちている／落ちていく若者二人を描いた『メタボラ』、光州抗争も一つの背景とする『ダーク』など多種多様なテーマで多くの作品を発表し、直木賞、江戸川乱歩賞など数多くの賞を受賞している作家である。『ポリテアイコン』は、テーマ的にそれら他の作品と緩くつながりながらも独自の内容を持っており、ユートピアの行く末を問題提起的に描く作品となっている。

以下、玄月と桐野の作品に現れる王国とそこで生きる住民たちを見ていくこととなるが、結論的に言うならば、桐野はユートピアの危機から新たな希望としてのユートピアを、玄月はユートピアの危機からディストピアへの転

一 朝鮮人部落に関しては、오세종 「국민문학의 경계지대 “조선부락”——1940~1950 년대의 문학과 작품의 중심이로」 『문학사』 『평화』 六집 一호, 서울대학교 통일평화연구원, 二〇一四において論じたことがある。

落を描き出す。いずれも危機を経ることになるが、その先の希望としてのユートピアと端的なデイストピアという差異は、二つの王国における植民地主義的な権力を志向することの可能／不可能という差異と重なり合っている。しかしその差異は「外部」とのつながり方の違いとして現れ、そこにおいて「蔭の棲みか」は独自の文学的表現の可能性を拓くのである。

## 二、「蔭の棲みか」の王国

まず玄月の王国と住民を見ていきたい。この王国の統治者は、「永山」という（帰化をした）在日朝鮮人である。大阪のとある場所（「大阪市東部」）に永山が作り上げた王国は、もともとは植民地期からの朝鮮人密集地域であったとされている。現在の大阪生野区にある朝鮮人密集地域がモデルとなっただけはいるが、それとは異なる架空の場所である。作品の設定では、そこは一九七〇年代まで豚を濟州式に飼い慣らし、近隣の農家と糞尿と物々交換する、そのような朝鮮の農村社会あるいは濟州の世界と重ね合わせられている。

ソバンの父らは広場の隅に共同便所を作るとき、すぐわきに柵で囲っただけの豚舎を設えた。これは父の故郷・濟州島ではふつうのやり方だった。「…」豚の糞尿は麦藁と混ぜ発酵させて肥料にし、近隣の農家でわずかな米や野菜と交換する。しかし、糞まみれの飼育法が誇張されて喧伝され、地域の日本人にかねらの豚を買うものはいなかった<sup>二</sup>

<sup>二</sup> 玄月「蔭の棲みか」、一三、一四頁。引用は磯谷治良・黒古一夫編『在日文学全集』第十卷、勉誠出版、二〇〇六年より。以

そのように済州との繋がりを維持する、半ば伝統的な生活空間であったこと、またそれに加えて日本社会から隔絶、排除された地域であるからこそ、七〇年代以降、住民は集落から流出していく。だが永山は、ほとんど廢墟と化したその場所を、朝鮮人たちが植民地期に搾取されたことを理由にして相場の1/5の価格で地主から買い取り、王国の基盤としていく。買い取った後永山は、オードリー・ヘップバーンの人気に便乗する形で「ヘップサンダル工場」を建て、「実業家」として歩み始める。ヘップサンダルが下火となると、ヨーロッパのブランド品の靴をコピーする工場へと鞍替えをすることでさらなる資本の蓄積を進め、王国の経済的基盤を整えていく。その後、土地価格の値上げを見込んだ投機に成功すると、近隣の駅前にはパチンコ店を建てることで経済規模を大きく拡大し、政治家に賄賂を贈るなどして王国を盤石にしていく。

さらに作品の現在時では、永山は自らの王国をさらに発展させるべく、昔からある長屋をニューカマーの韓国人や中国人ら「外国人」を不法に就労させるための住まいとして利用する。帰化したとはいえ自らも朝鮮半島にルーツがあるにもかかわらず、他の外国人と自らを区別、階層化を施し、そして賃金と住み込みの費用を限界までカットすることで結果的に王国は、植民地の反復、捻れた形での植民地主義が持続する場所となっていくのである。要するに永山の王国は、帝国日本の植民地支配の遺産であると同時に、捻れた形で植民地主義を賦活させる、そのような場所なのである。

統治者である永山は、経済的に支配するだけでなく、暴君としても君臨する。例えば、不法に就労させている韓

---

下、「蔭の棲みか」を引用する場合は全てここからである。

国人や中国人といった「外国人」たちが中国語、韓国語で話すことはさほど問題にしないが、自分に近い関係にある住民が「朝鮮語」を使うことを極度に嫌う（「おれの前で朝鮮語を話すな……じいさん、わかかって人が嫌がることするのは最低やぞ」<sup>三</sup>）。これは自分が朝鮮半島にルーツを持ちつつも朝鮮語ができないことのコンプレックスの裏返しであるものの、言語間にも階層化を施す不条理な命令である。そのような命令によって永山は、経済的な力だけでなく、言語の階層化も通じて住民のランク付けを施すのである。中国語、韓国語が許されるのは、自分より下の階層にいる「外国人」であり、その彼／彼女たちより上層にいる者たち（在日朝鮮人！）には日本語の使用が要求されるのである。

それだけでなく、王国内では永山による性暴力が日常化しており、王国住民の一人、また主人公でもある独居老人「ソバン」の話し相手のボランティア「佐伯さん」も永山はレイプする。

「なんやソバン爺、怒ってんのんか。そんなに怒るなや」

永山の子供のような物言いが、ソバンの殺意を完全に殺いでしまった。この集落では、この男はなにをやるうが許されるのだ。<sup>四</sup>

永山の性暴力は、住民の一人である「金村」の、「おれら、オバハンでもあの女（佐伯さん）とやったらヤレル、

三 「蔭の棲みか」、一三頁。

四 「蔭の棲みか」、四四頁。

少しなら金払ろてもええって、みんなで合意したんや。ソバン爺、もうヤツたんやろ？ 飽きたらまわしてくれ」  
五という発言に見られる通り、住民たちにも伝染してしまっている。そして金村の発言にある「まわしてくれ」は、上から下へと女性を物のように降ろしていくことを含意しており、この点において性暴力もまた、この王国内の各階層間の秩序を支えている。永山はそのような階層の頂点に君臨しているのであり、そして「この集落では、この男はなにをやるうが許されるのだ」というソバンの言葉が示すように、この頂点はまさに秩序の外としての例外状態であると言つてよい。そのように永山は例外状態に身を置くことで、永山王国の植民地主義的秩序を維持・再生する人物として君臨するのである。

しかしそのもう一方で、永山の絶対的権力が及んでいるように見えるこの王国は、決して安定しているわけではない。第一に、不法就労をさせられている一〇〇人ほどの「外国人」たちが、完全に永山に従属しているわけではないことが挙げられる。彼／彼女らの間で韓国語、中国語が日常的に飛び交うこともそうだが、「外国人」の間で執り行われている「地下銀行」という名の頼母子講を裏切った者を、彼らは永山の意志に逆らつても、私刑に処するのである。

ふん、社長はくすねられた二百万円を代弁するとまでいって猛反対したが、これはもう金の問題じゃないからな。信義だ。おれたちが異国で信義を失つたらこうなる。さすがの社長も止められない。六

五 「蔭の棲みか」、三九頁。

六 「蔭の棲みか」、四四頁。

これを契機として、永山の王国はデイストピアへと転落していくことになる。その意味で王国は、「他者」としての「外国人」たちによって内側から穴を開けられている。言い換えるとそのことは、植民地内の各階層がなかば独自の運動を行っていることも示しており、王国は統一性を完全には備えているわけではないのである。

第二に、王国は植民地主義を反復しているからこそ、生きる植民地経験者によって揺るがせられ、しかし逆説的に支えられるという構造の中にあることが挙げられる。この作品での植民地経験者とは、永山王国内において再生産された植民地的秩序を経験しているということもあるが、日本による植民地支配を経験した者である。その意味が二重性を帯びている。

作品での植民地経験者とは、主に二人であり、一人は「スツチャ」と呼ばれる老女である<sup>七</sup>。

七とはいえ「老女」であるスツチャは済州出身であることは分かるものの、植民地期にどう生きたかは具体的に描かれていない。スツチャもまた数十年前に頼母子講の金を持ち逃げしようとして捕まり、このときは「外国人」ではない住民（在日朝鮮人！）から凄惨なリンチにあつた女性である。次の引用は彼女がリンチに遭ったときの情景である。

男たちはスツチャが倒れそうになるたびに井戸水を頭から浴びせ、女たちは順に回される竹刀で背中や肩を小突いたり叩いたりした。人々は淡々と、さながら餅つきのリズムで繰り返した。「……」数十分後、瀕死だったはずのスツチャはとつぜん顔をあげ、だれにも聞き取れない言葉を喚きだした。それは数年に一度済州島から来る巫女の祈祷にも似ているが、しかしあきらかに呪いであると人々は感じた。

スツチャはこの事件によって脚に障害を抱えることとなったものの、今現在も集落で生きている。仮にスツチャが金を持って逃



もう一人の植民地経験者は、この作品の主人公「ソバン」である。本稿では「ソバン」に焦点をあてて論じたい。作品の現在時において七五歳のこの老人は、戦時中に右腕を失っており、身体に歴史が刻印されている。とはいえソバンは、朝鮮人労働者を監視する日本軍の兵士であったのであり、広い意味で親日派であった（親日派であったことは、作品において、学生運動に関わり撲殺された息子・光一による責め立てと、親子関係の絶縁を引き起こすことになる）。要するに植民地の被害と加害の両方を併せ持つ住民がソバンなのである。しかしそのような経歴とは別に、永山が王国建設のための土地を植民地支配を理由にして安く買い取ったのであれば、植民地の経験を生々しく伝えるソバンの失われた腕永は山王国を根底で支えている。つまりソバンの右腕が体現する帝国日本の植民地経験は、集落と一体のものと思なされているのである。

そうだが、この右腕が不当に置かれたからこそ、自分はこれまで集落ととも存在でき、その生をともにまっつげおさせた場合、永山王国の基盤そのものがその時点で崩壊していたかもしれない。その意味で彼女への暴力は、逆説的にこの王国を支えるものである。しかし他方で、「外国人」たちが頼母子講での裏切りを同じように私刑によって「解決」しようとするとき、スツチャヤに対する暴力の記憶がより一層生々しく、また「呪い」のように昔からの住民たちに立ち現れてくる点において、王国はスツチャヤの存在によって常に不安にさらされている。その二重の意味で彼女の存在は、永山王国の根底的な位置にあると言える（このことからスツチャヤは四・三事件のメタファーであると読めなくもない）。

八 蔭の棲みか、三六・三七頁。

うできるのだ。九

ソバンが植民地の歴史を体现しているために集落と一体であるという、そのような彼の自己認識及び位置は王国内で奇妙な依存関係をもたらす。一九九九年の日本では、在日朝鮮人の戦傷者たちが戦傷者障害年金を請求する訴訟を起こしているが、作品でもこの出来事が導入されており、ソバンも訴訟に加わることを住民の高本から勧められる。結果的にソバンは訴訟に加わらないが、高本が訴訟に加わることを勧めたのは、歴史認識問題をはじめとする日本の植民地化を原因とする様々な問題を、高本たち「戦後世代」では解決できないという思いがあるからである。

わしら「高本たち」の世代以降ではつけられんこの国へのけじめを、あんたらにつけてもらいたいんや。わしらは、いやわしは、あまりに、無力や。一〇

戦後補償問題は、日本政府と韓国政府の対応の問題もあって、現在においても解決していない。二〇一五年末のいわゆる「慰安婦合意」などを見るに、むしろ後退していると言ってもよい。また当事者が高齢化したこともあり、問題は次世代の者たちに引き継がれている。その意味で戦後補償問題をはじめとする植民地問題は、未来に向けて

九 「蔭の棲みか」、四七頁。

一〇 「蔭の棲みか」、四七頁。

投げかけられている。

だが高本の発言は、植民地問題をソバンに向けて、つまり過去に向けて投げ返すものである。そのような高本の発言から見えてくるのは、「わしら世代」とソバン世代（「あんたら」）との間の断絶は繋ぐことができないのであり、それゆえ植民地問題は経験したものだけが取り組める、という論理である。それはソバンが永山王国の同じ住民でありながら質的に異なる住民であること、つまりそれはソバンが、氷山とは異なる形でこの王国の外部にいるということである。言い換えるとソバンが自らを一体化していると見なす集落と永山王国は重なりつつも、しかし両者はズレをともなっているのである。ソバンが自らを「わしはいつたいどちら側の人間なのだ」と自嘲「するのも二、二つの植民地のはざままで生きているためである。高本が「この国へのけじめ」を「あんたにつけてもらいたい」と言うのも、そのようなズレを感じとっているためである。

整理するならば、永山の王国は「外国人」たちによって揺されており、さらにはスツチャ、そしてソバンによって境界が開かれ、そこから外部が流れ込んでいる。紙幅の都合上論じることができないが、ソバンとスツチャという共に王国の内部にいながら、しかし外部化されている二人を比較するならば、王国の様相はさらに複雑さを増すことになろう。

しかしながら、永山の王国を物理的に脅かす外部は、「外国人」でも、スツチャでも、ソバンでもない。国家権力である警察である。「外国人」たちによる私刑があったと聞き、王国に駆け付けた警察は、ソバンに向かって次のように言う。

二「蔭の棲みか」、三五頁。

じいさん。あんたがここに、日本に住むのは歴史的にもなんとか理解できる。しかし、おれの目の届くところで、百人もの出稼ぎ不法滞在者が自分たちだけのコミュニティを作るのはぜったいに許せん。この町は新宿でもミナミでもない、在日朝鮮人がちよつと多いだけのふつうの下町や。もうこれ以上外人はいらん。それはこの町のだれもが願っていることや。ええか、今日にもここを潰す。「…」じいさん、いまずぐ荷物をまとめたほうがいいぞ。一二

結局のところ、永山の王国は、国家権力が許す範囲内で存在することが許されていたのであり、永山の横暴さもその範囲内にある。その意味で王国内の暴力は、王国の外に広がっている権力が帯びる暴力性によって支えられている。黄奉模は、主流社会日本と永山王国の境界がなくなるとき最も厳しい弾圧が発生すると論じているが<sup>一三</sup>、厳密には「コミュニティ」が国家権力の許容範囲を超えて拡大しようとしたときに、弾圧が発生すると言うべきだろう。

ソバンが無謀にも警察に飛びかかり、しかし叩きのめされて意識が遠のくのは、ソバンが体現する外部が脆いことを示唆している。そしてソバンが永山王国を根底で支えていたとすれば、この脆さは、永山の王国の存在も儂いものでしかないことを示す。とはいえ、ソバンの存在がもたらす外部性は、王国の住民によっても（例えば高本）、

一二 「蔭の棲みか」、五〇頁。

一三 黄奉模「玄月の『蔭の棲みか』論」『国文学』九一号、二〇〇七年三月、三七〇頁。

また警察によっても（「もうこれ以上外人はいらん」）知覚されており、また脆いものでありながらも生き存えるものとしてある。後に論じるように、そこに「蔭の棲みか」の文学的可能性もあるのである。

### 三、『ポリティコン』の王国

次に桐野夏生『ポリティコン』である。この小説では、「唯腕村<sup>イワン</sup>」と呼ばれる、自給自足、相互扶助で生活をす  
る、東北の小さな村での人間模様が主として描かれる。

この「唯腕村」には実際のモデルがある。白権派の象徴的存在である武者小路実篤（一八八五～一九七六年）が関わった「新しき村」がそれである。「新しき村」は一九一八年（大正七年）一月に設立されたが、現在も実在し、自給自足に近い生活を住民たちは続けている<sup>一四</sup>。

村内会員と村外の協力会員から構成され、運営される新しき村は、一九一七年のロシア革命や大正デモクラシー、そして実篤に対するトルストイからの影響といった背景を持っており、人類の理想郷を目指して作られた村であった。また実篤の自伝的小説である『或る男』には、文学をやることと「新しき世界」を作ろうと考えたのは同時であり、それらは「双生児」であると記された個所が出てくる<sup>一五</sup>。実篤にとって文学をすることと新しき村を作ることは別々のことではなく、両者は人類の幸福の実現という共通の目的のもとにあったのである。また理想郷の実現

<sup>一四</sup> 現在の新しき村のウェブサイトもある。 <http://atarashiki-mura.or.jp/>（最終閲覧日二〇一八年九月二四日）。

<sup>一五</sup> 『或る男』『武者小路実篤全集』第三卷、新潮社、一九五四年、一八六頁。

という動機の裏側には、農夫や労働者を不当に利用して生活を営んでいることに対する実篤自身の罪責の念もあった。

我々は農夫と労働者の御陰で生きている。そして我々の分まで苦勞している。そしてその為に我々は労働者の方に無資格になっている。一六

だが『ポリテイコン』の「唯腕村」は、「新しき村」をモデルにしつつも、表面的に謳われるユートピアの裏面でのグロテスクともいえる「幸福」の追求を描き出しており、現代における理想郷とは何かを考えさせる場所となっている。

「唯腕村」創設以来の八〇年にわたるスローガンは、「我、友を愛すために生き、土を愛すために生き、人のために生きる」であり、実際他人への無償の愛、私有財産の禁止、自給自足が村の三原則となっている。このスローガンと原則によって、村はユートピアたるべく方向付けられているのである。

そのような村において主人公・高浪東一は、この村の創設者の一人、彫刻家・高浪素峰の曾孫にあたり、またもう一人の創設者である作家・羅我誠の血も引いていることから、「唯腕村」の理事長（統治者）となることが半ば決まっている人物である。

「東一君の祖国はどこだえ」

一六 武者小路実篤「新しき村に就ての対話」大津山国夫編『新しき村の創造』富山書房、一九七七年、四五頁。

「日本です」

「お前さんは、日本人かもしれないけれども、お前さんの祖国は日本じゃない、ここだよ。お前さんは唯腕村の純血種なんだから……」<sup>一七</sup>

東一が幼いころに交わした羅我誠との会話である。東一は、大人となった後もたびたびこの会話を思い出すことになる。だが東一が成人し大人になった頃には、村の住民は高齢化しており、経済的にも養鶏や東一の父（素一）が主催する劇団の公演料だけでしか収入が得られない状況となっている。つまり村はいつ廃村してもおかしくない状態にあり、若者もほほいさない中に東一は置かれているのである。

そのため、当然ながら新たな村民を受け入れる余裕などないのだが、にもかかわらず村民になることを求めて四人が尋ねてくる。美しい女子高生・真矢、彼女の母親と婚姻関係にあった男・クニタ、脱北者の女・スオンとその息子・アキラ（アンヒョル）の四人である。真矢の母親は、脱北者を支援する「ビジネス」をしており、中朝の国境で捕まったと連絡があったことから、その「仕事」に関わっていたクニタは真矢らを連れ、隠れ場そして生活の場を求めて「唯腕村」にやってくる。「唯腕村」は「日本じゃない」村であるからこそ、日本人だけでなく脱北者といった他者が身を寄せうる場所となるのである。その意味で「唯腕村」は日本の外部的な位置にある。また「住民」を日本人に限定せず、朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮と略記）の住民や後に登場するベトナムの女性などにも開いているところなどは、人類の理想郷としての「新しき村」を可能な限りその理想に近づけるものであ

ろう一八。何はともあれ「唯腕村」は、日本社会と繋がりつつも異質な場であるが故に他者に向けて開かれようとするのである。そしてこのことが東一をして、この村の統治者となるべくせき立てていく。

廃村するかもしれない危機的状况にあつて、東一は「唯腕村」を自らの王国とすべく動いていく。細々として行った養鶏を拡大し、より規模の大きいそして収益の上がるものにし、また村の中で独自に無農薬米を作り密かに高い収益を上げていた村民・山路と手を組み、その米を「唯腕村」ブランドとして売っていくことになる。さらに東一は、ヤクザから資金を借り受け事業を拡大すると、詐欺まがいに商品売り、そして知名度の上がつた村に集まってきた若者たちを搾取してまで村を大きくし、そこに君臨しようとする。

そのような東一の王国建設の情熱を支えているのは、金もそうであるが、むしろ他者に開かれたこの村にやってくる女たちである。女の存在こそが、東一の王国作りのモチベーションを支えているのである。

だが、たったひとつ不便があるとしたら、いや、どうにも我慢できないことがあるとしたら、恋をしたくなるような女が、周囲に一人もないことだった。一九

一八とはいえ脱北者とされる「スオン」は、物語の最後においては北朝鮮の工作員かもしれない描かれ方をされており、その点において日本（文学）の北朝鮮表象を無批判的に引き継いでいるようにも見える。この点、日本現代文学における北朝鮮表象を総体的に整理し、分析する必要がある。日本現代文学における北朝鮮表象とは、例えば村上龍『半島を出よ』（幻冬舎、二〇〇五年）に見られるところのものである。

一九 『ポリティコン』上、三四頁。



美しい真矢が村に現れると、東一は彼女を自らの物にすべく、「就学支援」として金をちらつかせ関係を迫っていく。真矢は強制的に肉体関係を強いられるが、村から逃げだし、しかし後に東一に売られ風俗の世界に身を落とすことになる。東一の性への耽溺はそれに留まらず、真矢がいなくなった後は、村に残った外国人の女、そして新たに村に来たベトナムの女性・ホアや中国から来たメイ、あるいは若い日本人女性と肉体関係を持ち、ハーレムを築き上げていく。

だが重要なことは、「恋をしたくなるような女」が周りに増えれば増えるほど、東一は恋から遠ざかっていくことである。そして「唯腕村」が曾祖父である高浪素峰と羅我薫子という男女が中心になって作られたとすれば、多くの女性がいながらも理想的なペアとなり得る者がいないことは、「唯腕村」から東一自身が逸脱していかざるを得なくなることでもある。

さらには「唯腕村」の住民たちの半分は、東一の強引な手法や横暴さ、すなわち「唯腕村」の理想からの逸脱に反発し、無農薬米を作っていた山路も彼から離れていくことになる。村は二分し、唯一の味方であったクニタが病で死ぬと、孤立した東一は村民全員の「相互批判会」によって追放されてしまう。事実的にも村の外部へと放逐されるのである。

紙幅の都合上、この分厚い「唯腕村」サーガの全てを論じることにはできないが、本稿のテーマにおいて注目したのは、東一が追放され、何一つ持たない男となった後である。追放された東一は、改めて真矢を探し出し、北海道に新しい「唯腕村」を建設するつもりであることを告げる。

「何の用事で来たの」

「俺、北海道に土地買ったんだ。唯腕村をまたやろうと思って。だから、マヤちゃん来ないか。俺と一緒に、高浪素峰と羅我薫子にならねえか」

「何それ」

「唯腕村の開祖だ。薫子は、羅我誠の奥さんだったんだよ。今度こそ、過疎の地で理念通りに農業をやろうと思うんだ」

「またも王国を作ろうというのか。真矢は、潮の匂いのする風を吸い込んだ。東一が囚われているものを、自分がどこまで受け入れられるかわからなかった。だが、自由に生きるつもりでいても、いつか自由が病となつて自分を縛るかもしれない。」

「行ってみようか」

「思ってもみなかった言葉が、真矢の口を衝いて出た。二〇

これは、実際の「新しき村」も、内部分裂ではない理由であるが、宮崎県から埼玉県に村の所在地を移した事実を背景にしていると思われる。しかし『ポリティコン』では、単に新しく村が建設されるようにするに留まらない意味を帯びている。

東一の意志が、高浪素峰と羅我薫子による建国神話をなぞろうとするものである以上、「唯腕村」という東一の

王国は、一度は挫折を経験したとはいえ、彼の中でその存在は消失してもいないし、揺らいでさえない。むしろ真矢という「恋をしたくなる女」と出会い直すことで、より原「唯腕村」に近い形での開村が目指されるのである。だが問題となるのは、追放された東一が買ったのは、北海道の土地だということである。テッサ・モーリススズキは『辺境からの眺める』で次のように論じている。

徳川の商業植民地主義は、世界中の他地域での植民地主義と相似性をもつだけではなく、後にアジアの他地域で日本がおこなった植民地事業に適用される莫大な経験と思想のモデルを創出した。二

つまり帝国日本に引き継がれることになる、徳川時代に行われた北海道の植民地化は、のちの台湾や朝鮮などの植民地化の最初の訓練の場となったということである。東一が新たな「王国」を北海道に建国することは、そのような日本の植民地化の歴史と重なるものである。この点において東一の「唯腕村」の再建築は、植民地の歴史的起点への送り返しとなっている。

北海道に「唯腕村」をあらためて開村するというのは、作者・桐野夏生のたまたまの発想だったかもしれない。だが図らずも日本の植民地化事業を反復していることも事実である。そうだとすれば、「唯腕村」というユートピアを建設するという行為自体が問われない限り、「唯腕村」は絶望をまき散らしうる「希望」としてあり続ける。つまりデイストピアを外部にもたらず「ユートピア」としての「唯腕村」である。作品では「唯腕村」内での多様

二 テッサ・モーリススズキ『辺境からの眺める——アイヌが経験する近代』（大川正彦訳）みすず書房、二〇〇〇年、三〇頁。

な事件が描かれるが、それらはこのデイストピアのまき散らしに比べれば取るに足らない問題でしかないのであり、むしろそれぞれの事件は自らの根底を問わない形での各々の「ユートピア」の追求なのである。

そのような植民地化事業としての「唯腕村」を「蔭の棲みか」との関係で言うならば、東一の王国は永山の王国を取り囲むもの、すなわち朝鮮人集落の外部に広がる権力として、希望をいつでも絶望に変換する力の場と見なすことができる。その意味で永山の王国と東一の王国は、同じく日本国内の特殊な空間であるものの、両者は階層化されている。というよりも東一の王国は、帝国日本の植民地の歴史をなぞるものである以上、ほぼ日本である。言い換えれば、自らの外部を飲み込んでいく「唯腕村」は、「日本」の別名に他ならないのである。

本節のはじめにおいて武者小路実篤の「新しき村」が、人類の幸福のための理想郷を目指していたことを確認した。桐野の『ポリティコン』は、その理想郷の追求がうみだすグロテスクな未来を描き出していると言うこともできる。というのも東一があらためて「唯腕村」を開村しようとするのは、植民地化事業を何度でもはじめから開始することができるということでもあり、『ポリティコン』が描きだすグロテスクさはここに極まっているからである。

いずれにせよ作品に返すならば、「蔭の棲みか」が「ソバン」という外部が保持されていたのに対し、『ポリティコン』の「唯腕村」は外部を開くというよりも、結果的に閉ざしていく村としてあるのである。

#### 四・結論―「蔭の棲みか」における外部の行方

本稿では二つの作品を王国とその外部という観点から論じてきた。「蔭の棲みか」では「外国人」「スッチャ」そしてとりわけ「ソバン」の存在が注目すべき外部を開いていると論じた。また『ポリティコン』においては結果的

に外部が飲み込まれていくと述べた。

もちろん『ポリテイコン』においても、詳しい分析はできないが、外部がわずかながら書き込まれている。作品のもう一人の主人公・真矢は、風俗の世界に身を落としたあと、「恩人」でもあるクニタの死に際して「唯腕村」に一時的に戻ってくる。その時、真矢はクニタの携帯電話を手に入れるが、そこに、突然、北朝鮮に捕まったと思われる母から電話がかかってくる。すなわち『ポリテイコン』において一瞬間かれる外部とは、母からの電話が開く特定不可能な場所としてのそれである。しかし東一の「唯腕村」が植民地の歴史を辿ることで外部を飲み込んでいく力の場としてであるとすれば、携帯電話が開く外部はいっ駆逐されてもおかしくない危機の下にある。

他方、永山の王国も植民地の再生産であったとはいえ、その外には、永山の王国を被植民地化する植民地主義的権力が広がっていたのであり、しかしそのため逆説的に王国自体に異質さが付与されている。この点において氷山の王国は、帝国日本と重なってしまう東一の「唯腕村」とは様相を異にする。パク・チョンイは「蔭の棲みか」の「蔭」とは、「棲みか」の内部者にとつては植民地支配の結果として自然に発生した、どちらかという肯定的な意味となり、「棲みか」の外部者にとつては不法地帯という否定的な意味になっていると指摘している。そこからパクは、「蔭の棲みか」というタイトルには、「蔭」をめぐる内部者と外部者の肯定的、否定的認識、そして日本の社会の否定的視覚に対する内部者の反問が込められている」と述べる<sup>三〇</sup>。妥当な結論であるだろう。とはいえ永山の王国においては、王国に異質さが付与されているだけでなく、彼が制御しきれない「外国人」たちがすでに空間的な外部となっており、また帝国日本の植民地支配を経験したソバンが時間的な外部性を分泌し続けていることか

ら、外部が多様な形で現れている。その意味で外部と内部は単純に分けられないし、またこの多様な外部の現れこそが、『蔭の棲みか』と『ポリテイコン』を分かťポイントとなる。また、永山王国は権力によって破壊されるが、しかし外部性がソバン自体に不可分的に留め置かれていたことを考慮するとき、「蔭」とは朝鮮人集落だけを指すのではなく、身体に宿るそれでもある。すなわち「ソバン」の身体も「蔭」の「棲みか」だと考えられるのである。そうだとすれば玄月が描き出したのは、日本社会にひそかに「棲」まうの「蔭」としての永山王国だけでなく、王国とは別に、ということとは除去困難な、人の影のような「蔭」でもある。チャン・アンソンは、玄月の言う「人間の普遍性」という言葉を手掛かりに、「蔭の棲みか」を論じている<sup>三三</sup>。この場合「人間の普遍性」とは、「資本の論理によって進行する人間性の喪失、個人の無力感、疎通の不在などの問題」のことであり、それは「産業社会が招来する一般的な病理現象に由来するものである」こと、そして「集団村において経験するソバンの問題」は、その病理が「日本社会の暗い断面」として提示されたものだとする<sup>三四</sup>。やや大括りの規定ではあるものの、この「ソバンの問題」がまさに「蔭」のことである。チャンは、「ソバンの問題」が破壊もされず、かつその特異性も失われず、外部（少なくとも日本社会）と疎通しえたとき、玄月の言う「人間の普遍性」に接近しようと述べている<sup>三五</sup>。王国は破壊されるが、影としての「蔭」は除去困難であるとき、「疎通」のために残されるのが「蔭」としての身

三三 장안순 「현월의 『그들의 집』 —— 집단촌의 소수자」 『일본문학연구』 제三二집, 二〇一一年。しかしながら「人間の普遍性」という言葉が、日本人／朝鮮人や朝鮮人内部の階層性、ソバンの他者性等とどれほど親和的であるかは検討の余地がある。

三四 장안순 「현월의 『그들의 집』 —— 집단촌의 소수자」 二七五頁。

三五 장안순 「현월의 『그들의 집』 —— 집단촌의 소수자」 二七六頁。

体であり、それこそが「人間の普遍性」と関わり合うものである。このことは、「ソバン」のモデルが、金石範「看守朴書房」の主人公「朴書房」であることから例証されよう。王国ではなく、「ソバン」の身体が、作品を超えて散種していくからである。そしてそれは「蔭」としての身体が、日本だけでなく東アジアのあちらこちらに散らばっていくことである。

もちろんそれら複数の「蔭」も、植民地主義の暴力によって消し去られる可能性はある。だが、少なくとも、「外人」や「ソバン」という外部としての身体は、たとえ王国自体が消去したとしても、目の前に残り続けるのである。彼らが王国の外に移ったとしても、そこで外部を開き続ける。そしてそれは文学が描くべき外であることを示唆し続けるものであるだろう。そこに玄月「蔭の棲みか」が開いた文学的な可能性もある。